狐妖譚の変容と継承

—「大別狐妖」から『二刻拍案驚奇』及び『型世言』まで—

村　田　和　弘

0.　はじめに

『二刻拍案驚奇』（以下二刻と略称）巻29に「贈芝麻識破假形，擷草藥巧諧眞偶」という、狐妖の異類通婚譚を扱った一篇がある。従来、狐妖譚については、「任氏伝」から宋人伝奇を経て『聊斎志異』まで、文言小説を中心に詳しく論じられており、その変容の経過も跡付けられている[1]。だが、そこに明代の小説をも含めた論述はあまりなされておらず、狐妖譚の系譜の上で空白となっている。しかし実際には、明代は狐妖譚が大量に生産された時代であり、二刻巻29もこうした背景を持って始めて成立しえたはずである。本稿は、二刻巻29の背景となった明代の狐妖譚の在り様を探り、その上で二刻巻29がどのように位置付けられるのか、そして、やはり明末の白話小説である『型世言』に収録された狐妖譚とはどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。

1.　狐妖譚の明末における背景

二刻の成立は崇禎五年と推定されるが[2]、当時において狐妖譚はどのように把握されていたのであろうか。他ならぬ二刻の編者である凌濛初が二刻巻29正話の冒頭で、説話人に次のように語らせている[3]。

　這一回書，乃京師老郎傳留，原名「靈狐三束草」。①天地間之物，惟狐最靈，善能變幻，故名狐魅。②北方最多，③宋時有「無狐魅不成村」之說。④又性極好淫，其涎染着人，無不迷惑，故又名「狐媚」，以比世間淫女。⑤唐時有「狐媚偏能惑主」之檄。自然雖是个妖物，其間原有好歹。⑥如任氏以身殉鄭鎣，連貞節之事，也是有的。⑦至於成就人功名，⑧度脫人災厄，⑨撮合人夫婦，這樣的事，往往有之。莫謂妖類便無好心，只要有緣遇得着。

このナレーションに示されている狐妖は、全て『太平広記』などにもとづくところがある[4]。下線部①②③は狐の妖性、地理的分布、信仰の対象など、狐に

ついての一般的事項をまとめている。④⑤は狐を人間を惑わす害獣としてとらえている[5]。⑥は「任氏伝」に代表される異類通婚型の狐妖を指す。⑦は人間の立身出世を助ける狐妖、⑧は人間を災難などから免れさせる狐妖であるが、これらの狐妖譚はいずれもその前段に、人間に捕らえられ、命を救われるというプロットを持ち、報恩型の狐妖といえる。このように二刻巻29のナレーションは狐妖譚にまず害獣型・異類通婚型・報恩型の三つの類型を見出している。

ところで、⑨の人間の夫婦を取り持つというプロットを持つ狐妖譚は、『太平広記』には見出せない。では凌濛初の創作かと言えば、そうではない。万暦年間に金陵の李潮聚奎楼より『輪廻醒世』という善書が出版されており[6]、その巻十七妖魔部に「狐媒合婚」という話がある。時は永楽。概容は次の通り。

呉郡の顧喬は何三姑と名乗る女性と遭い情交を重ね、数ヶ月後に憔悴して死亡する。何三姑は詩を書き残して去る。喬の棺は城外の土地廟に殯される。鐘氏が牛家へ嫁す途中土地廟の前で轎を停めると、何三姑は鐘氏を攫い喬の棺に入れ、鐘氏に替り嫁す。偽物であることが露見すると消え去る。鐘家は妖魔の仕業と考え、天師に退治を依頼する。一方、喬の父親は赴任のため棺を埋葬しようとすると、棺の中から話し声がする。喬は蘇生し鐘氏を何三姑と見まがう。詩は予言であり，鐘氏の顔を借りて仲を取り持った（撮合）事が分かり、二人は結婚する。天師が退治してみると狐であった。自分は陰司の遣わしたもので、二人の夙縁を果たすためだと狐は白状し、釈放される。

この話には異類通婚型、害獣退治型のモチーフに人間の男女を取り持つというモチーフが付加されており、このような話型を「狐媒」と呼んでいたことがわかる。この狐媒型狐妖譚は『狐媚叢談』[7]巻4「狐死塔下」など、万暦以降さかんに書かれるようになり、万暦以降成立した新しい類型の狐妖譚ということができる[8]。⑨は「撮合」という言葉を使っていることからも、狐媒が一つの類型と意識されていたことを正確に反映している。二刻巻29はこの狐媒型の狐妖譚である。次にそのプロットを示す[9]。

1—①〔時〕 天順年間。

②〔人物〕 浙江の客商、蔣生、蔣駙馬とあだ名される。

③〔場所〕 漢陽馬口地方、馬月渓の店

④〔出会い〕 馬月渓の親族、馬少卿の娘雲容を楼の窓に見かけ心を奪われる。雲容も蔣生に目を遣る。

⑤〔延滞1〕 蔣生は結婚の難しさを思う。

〔延滞2〕 蔣生は商売を口実に屋敷に入り、雲容も人陰から蔣生を窺

う。

2—① 〔交情〕 ある晩、雲容が蔣生を訪れる。

② 〔禁則と誓約〕 雲容は蔣生に外出・口外を禁ずる。蔣生は約束する。

③ 〔異常〕 蔣生は倦怠を覚え憔悴する。

④ 〔エピソード・異常の進行〕 同行者に物音を盗み聞きされる。蔣生は日毎に衰弱し，自分でも異変に気づく。

3—① 〔第三者〕 夏良策。

② 〔禁則破り〕 蔣生は夏良策に事実を明かす。

③ 〔第三者による怪の明示〕 夏良策は雲容が狐妖であることを見抜く。

④ 〔仕掛〕 夏良策は蔣生に胡麻を盛った布袋を渡し，雲容に持たせる。

⑤ 〔露見〕 胡麻の跡を追い，狐を発見する。

⑥ 〔報恩〕 狐が蔣生に三束の薬草を与え、一束で自身の病を治し、一束で雲容を癩病に罹らせ，一束で治療すれば，雲容を手に入れられると教える。

4—① 〔発病・団円の契機〕 雲容は発病し、父母は治療した者を婿とすると約束する。

② 〔治療・団円〕 蔣生は雲容を治療し結婚する。

5 〔後日談1〕 雲容は蔣生に薬草の出所を問う。蔣生は狐妖だけを隠し事実を明かす。

〔後日談2〕 夏良策は蔣生に事のいきさつを問う。蔣生は自分が薬草で発病させたトリックだけを隠し事実を明かす。

〔後日談3〕 あだ名の蔣駙馬が馬口で馬月渓の店に泊まり馬少卿の婿となる予兆であったと解かれる。

1から3—⑤までは異類通婚型、3—⑥は報恩型、4以降は狐は登場せず、才子佳人の団円劇となっている。このように二刻巻29は当時最も新しい狐妖譚を採用した。そしてナレーションでそれを系譜的に整理してみせたのである。

2. 凌濛初の観点

凌濛初はこの物語に対して、入話から正話へ移るナレーションで次のようなコメントを述べている。「而今説一个妖物，也與人相好了，留着些草藥，不但醫好了病，又弄出許多姻緣事體，成就他一生夫婦，更爲奇怪」。妖物といいながら狐妖の害には触れず、狐媒型のもつ趣向の面白さを強調している。

ここで注意しなければならないのは、このように狐をもっぱら物語の類型で

とらえることは、当時かなり異質であったことだ。『剪灯余話』巻3「胡媚娘伝」で道士が妖狐を誅罰する檄文が狐の資料を列挙して何の統一性もなく，しかも檄文という性格上、狐であることそのものが悪とされている。また『剪灯新話』巻2「牡丹灯記」で、死亡した男主人公が「乃致如鄭子逢九尾狐而愛憐。事既莫追，悔將奚及」と、任氏の行為に喩えて否定的に供述している[10]。それに対し凌濛初が任氏について「以身殉鄭鎣，連貞節之事，也是有的」と、任氏の貞節を肯定的に評価するのは、狐すなわち悪の図式に拘われずに、物語の構造を見る視点があったからであろう。ナレーションの最後に語るように、凌濛初にとって妖類は好い心を持たないなどという必要はなく、寧ろ宿縁という展開律に沿って、二人が出会いさえすればよいのであった。

この構造に着目する視点は、凌濛初が戯曲家であったことに由来しよう。当時の崑曲を中心にした文采過剰の劇風を批評して次のようにいう。

戯曲搭架，亦是要事，不妥則全傳可憎矣。舊戯無扭捏巧造之弊，稍有牽強，略附神鬼作用而已，故都大雅可觀[11]。

戯曲は構成（搭架）が大事であり、構成が合わないと全劇が駄目になってしまう。元曲（舊戯）は無理矢理作った弊害がなく、ややこじつけがあっても、僅かに神鬼の働きを借りるだけで、それで大雅を存し観るべきものである。この意見は小説観としても受け取れよう。神鬼の働きも舞台回しとして構成を助けるものであるならば許容されると意識されていたのである。この神鬼を狐に置き換えれば、狐媒譚は構成として凌濛初の基準に合う、妥当なものとなる。このようにして凌濛初の意識から狐妖のマイナスイメージは払拭され、舞台回しとしての狐の存在に関心が移ったといえるであろう[12]。

3. 二刻巻29の来源

ここで問題となるのが二刻巻29の来源は何かということである[13]。従来は『情史』巻12情媒類「大別狐」が考えられてきたが、これは類話ではあるが、来源とするのは誤りで、『耳談』巻7「大別狐妖」がより直接の来源だと考えられる。『耳談』（〈耳〉と略す）と『情史』（〈情〉と略す）はほぼ同文だが、若干の異同が見られる[14]。三者の異同をまとめると次のようになる（〈二〉は二刻巻29の略）。

1、〈情〉：生如其言。〈耳〉：而生與狐皆罔然。

〈二〉：蔣生不知何意，那小姐也不問是甚麼物件。（3—④）

2、〈情〉：該当文無し。〈耳〉：明日，生亦悟。

〈二〉：蔣生恍然大悟。（3―⑤）

3、〈情〉：生遂謁門。〈耳〉：生遂揭門書。

〈二〉：蔣生…卽揭了門前榜文。（4―②）

1は夏良策の仕掛に対する蔣生と狐の反応だが、〈情〉は単に「その通りにした」と述べるにとどまるが、〈耳〉は二人とも訳が分からないと述べ、〈二〉の記述は〈耳〉をふくらませたものである。2は〈耳・二〉ともに仕掛を悟る記述があるが、〈情〉には該当する記述がない。3は〈情〉の「謁門」が訪問の意であるに対し、〈二〉は門前の貼り紙を掲げると意味が異なり、〈耳〉と共通する(19)。二刻巻29の表現は『耳談』の方により近いと言える。

また二刻巻29末尾「野史氏曰」以下の批評文は、『情史』とは後半部が異なるのに対して、『耳談』とは全文が一致する。異なる部分を見ると、『耳談』は「思慮不起，天君奏然，卽狐何爲。然以禍始而以福終，亦生厚幸。雖然狐媒，猶狐媚也。終死色刃矣」と、狐媒を狐媚という従来の狐妖の否定的な枠組みでとらえている。一方『情史』は「然竟以此得眞女矣。燕昭市駿骨，而千里之馬果至。以僞始，以眞終。狐雖異類，可以情感。況於筑臺禮士者乎」と、まず『戦国策』燕策を引用し、偽りから真が得られることを説明し、異類の狐でさえ情に感じれば良い結果が得られると、狐媒を情と真の視点から肯定的にとらえている。『情史』のとらえ方の方が二刻巻29に近いのは明らかだろう。にもかかわらず両者の批評文が異なるのは、つまるところ『情史』が直接の来源ではないことを示している。

凌濛初が来源の批評文をそのまま使っていることは、〈耳・情〉共通の部分で「生始窺女，而極慕思，女不知也」と、相手の娘は気付かなかったとあり、〈耳・情〉はこれで問題はないが、〈二〉では1―④と合致しない。これは本文に手を加えて批評文をそのままにした結果生じた粗齬であることから分かる。従って批評文と本文とを分けて考える必要はなく、批評文の異同が決定的な証拠となる。

『情史』の成立年は不明だが、『耳談』は万暦二十五年刊であるから、『情史』の編者が『耳談』を『情史』に編入した際に、批評文を編者の意識に合うように書き換えたと考えられる。『情史』の編者が二刻を見ていたかどうかの問題は今の所不明とするより他はないが、狐媒に対する態度は近いものがあった。「大別狐」には注で狐媒と明記してあり(20)、またその前の「裴越客」（『拍案驚奇』巻5と同話）の批評文には、その物語が虎媒であるとして「夫撮合爲媒，越客婚有日矣」と、はっきり「撮合」という類型を自覚している。

以上を整理すると、『情史』と二刻巻29は直接関係し合う親子関係ではなく、『耳談』を親とする兄弟関係であると断定できよう。

ところで、孫楷第は来源に呉大振編、刊行年不明の『広艶異編』巻13獣部「蔣生」を挙げている[17]。この話は万暦三十九年（1611）刊劉仲達編『鴻書』巻91鳥獣部「狐」に節略されて引かれており、それ以前の成立である。これと上記三者との関係を見てみると、設定・表現・プロットの各面で異なるところがある。

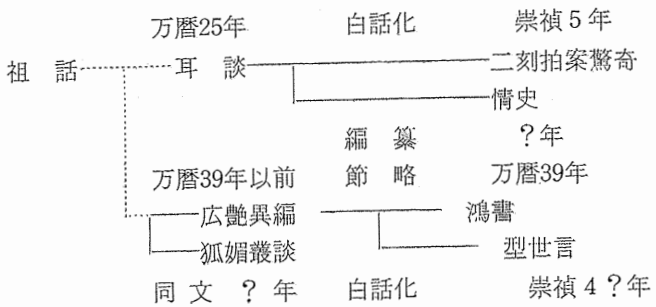
設定では、1—②で〈広〉（『広艶異編』の略）[18]は同行者にも触れ、後に狐妖を暴く役を担わせるが、〈耳・二〉は3—③で始めて第三者を登場させている。また、3—②で〈耳〉は「及疾力，始曰」と、〈二〉と同じく身体が衰弱したことで事実を明かすが、〈広〉は「蔣生病篤亦自恐，又見馬家之女，所見不似乎有情，乃道其詳」と、相手の女性に気がある風にも見えず、それで明かすことになる。

プロットでは、2—④で〈情〉には「其儕若夜聞人聲，疑之」[19]と〈二〉と同じエピソードがあるが、〈広〉にはない。また4—①で〈耳〉は〈二〉と同じく貼り紙という小道具を使うが、〈広〉にはこの小道具が出てこず、3—⑥に狐の「汝令人求之（娘一筆者注）自醫」という台詞があり、蔣生から求婚を申し出る設定になっている。従って、これ以後4—②の団円へ到る過程が全く違うものとなっている。

表現では、2—②禁則で〈耳〉「必愼口修持，始永其好」〈広〉「日聞見我，不可嬉笑。只如往日，可保終始」、また誓約で〈耳〉「而口三緘，足不外趾」〈広〉「日攻書史，目不外視」と、それぞれ似た表現を残しながらも異なった描写を行っている。また、3—③で〈耳〉「聞此地夙有狐鬼，必是物也」〈二〉「聞得此地慣有狐妖，善能變化惑人，仁兄所遇，必是此物」と、第三者の台詞がほぼ同じだが、〈広〉には該当する台詞がなく、わずかに3—①で「盧諭以鬼神不測之言」とあるだけである。3—⑤でも〈耳〉「今爲汝看破吾行藏，亦是緣盡」〈二〉「我爲你看破了行藏，也是緣分盡了」と、正体を看破された狐の台詞がほぼ同じだが、〈広〉にはない。

このように比較してくると、『広艶異編』は、『耳談』と共通する祖話を仮定できるようだが、明らかに『耳談』とは系統を異にするテキストである。そして『狐媚叢談』巻5「大別山狐」は、成立年が不明なので前後関係は分からないが、『広艶異編』と同文である[20]。つまり、『耳談』系統とは別に『広艶異編』系統のテキストの流れを設定しなければならず、二刻巻29のプロットは『耳談』系統に属しており、後者と関係付けるのは妥当でないことになる[21]。以上の関

係を図に示すと、次のようになる。



4.　二刻巻29のオリジナリティ

来源の確定を踏まえて、では二刻巻29のオリジナリティは何処にあるのかを見ると、独自なプロットはほとんど見られない。このことは凌濛初の関心が、物語の構造の把握と表裏を成して、物語の創出にはなかったことを示している。類型からの逸脱に新しさを感じるのではなく、その類型の中で如何に物語をふくらませるかが最大関心事であった。唯一他にはない構成要素で、凌濛初自身の言葉で語られた部分は、５の後日談の三つのエピソードである。全20葉中の約２葉を占める三つのエピソードは何のために存在するのか。そこには一つのパターンが認められる。物語という行為において、特に擬話本という語りを真似た文体の物語においては、全ての事実を知っているのは読者と主人公と作者だけであり、他の登場人物はそれぞれの立場から、関係する一部分のプロットしか知り得ない。後日談１は、馬小姐は主人公と狐精（凌濛初はここから狐精という言葉を使っている。妖性から精性への変化はそのまま狐の役割に対する凌濛初の態度の変化である）とのいきさつを知り得ないが薬草のことは知っており、それに対する蔣生の説明である。後日談２は、夏良策は狐精のいきさつは知っているけれども、薬草のトリックは知り得ず、それに対する蔣生の説明である。物語中唯一全知の存在である主人公が相手に隠れていた事実を明かすことは、当事者すべてが物語を知ることである。だが凌濛初は主人公に全てを明かさせてはいない。馬小姐には「心意志誠了，感動一位仙女，假托小姐容貌來與小生往來了多時。後被小生識破，他方纔說，果然不是眞小姐，小姐應該目下有災，就把一束草，敎小生來救小姐，說當有姻緣之分」と，仙女が媒人だと偽り狐精であることを隠し、夏良策には「他贈此藥草，敎小弟去醫好馬小姐，就有姻緣之分」と、自分が病気に罹らせたことを隠す。この二つの説明の中で

凌濛初は「姻緣之分」を繰り返し強調している。宿緣で結ばれる二人であるからには主人公が悪人であってはならず、それで周囲の登場人物が主人公に対し悪い印象を持つことなしに物語の全体を知るように処理した。さらに後日談3は謎解きとなっているが、この謎はそもそも凌濛初が物語の冒頭1—②で読者に対して仕掛けたものである。蔣駙馬というあだ名は『耳談』『情史』『広艶異編』のいずれにも見えない。またそのために店名を変え、隣家であった馬氏を店の親族とする。そしてそれを末尾で読者に対して得意気に解き明かす。作者と登場人物と読者はここで同じ物語を共有し，物語という行為が閉じるのである。凌濛初は全てが明るみに出て物語が一挙に終結することにカタルシスを感じていたかのように、この手法を多用する。この場合は主人公が全知であったが、主人公が周囲に騙される場合でも、同じように結末においてペテンが明かされ、何も知らなかった主人公がペテンの全貌を知って閉じる一群の物語があり(23)、二拍の中で一つの特徴的な形式となっている(24)。類型の保持と独自性を兼ねた工夫と言える。

5. 二刻巻29と『型世言』

二拍の後、『三刻拍案驚奇』（以下三刻と略称）が出版され、その巻20「良緣狐作合，伉儷草能偕」は二刻巻29と同話であるとされてきた(25)。三刻は享保十一年（1726、雍正四年）の『舶載書目』に著録されることから、その原刊本がそれ以前の成立であることに問題はないが、三刻がもとづいた『幻影』の原刊本は、三刻に付されている夢覚道人の序文「時□□□未仲夏」より、崇禎辛未四年・崇禎癸未十六年・順治乙未十二年のいずれかであると推定されている。決定的な証拠のないまま、崇禎四・十六年の両説が通行してきた(26)。ところが近年，新たに『型世言』が発見され，『幻影』・三刻のもとづいたものが『型世言』であり、崇禎四、五年の刊行であること、『幻影』・三刻が清朝に入ってから編纂された書物であることはほぼ動かないところとなった(27)。三刻巻20と『型世言』第38回「妖狐巧合良緣，蔣郎終偕伉儷」（以下型第38回と略称）とは、三刻が回末の批評文を削除する以外、本文は全く同文である(28)。『型世言』が崇禎四年の成立だとすると、二刻より先行することになり、言われるように二刻巻29が型第38回を再収したことになる(29)。

だが果たしてそうか。素材である文言小説の方に二つの系統が存在することを見てきた今、白話小説の両者が同話であるという前提から疑ってかかる必要があろう。そこで、先の〈耳〉と〈広〉の比較に沿って型第38回の位置を見て

みる。

〔設定〕1—②：〈広〉と同じ。正体を明かす役割は担っていない。3—②：〈広〉と同じ。「他（蔣生—筆者注）戯了臉，叫道文姫。文姫就作色道，文姫不是你叫的」と、相手に情の無いことをいう。

〔プロット〕4—①：〈広〉と同じ。貼り紙という小道具を使わず、3—⑥で「你可說醫，得只要他與你作妻子」と狐にいわせている。ところで〈広〉は4—①で発病した娘に対する父母の様子を「父母不能近，求其速死而不得，欲投之於江而不忍」といい、〈型〉は「文姫也懨懨一息道，…不如把我丢入江水中，倒也干淨，也只得一時苦」と娘の台詞として似た表現をとっている。

〔表現〕2—②禁則：「相見時切不可戯謔」誓約：「也不甚進裡邊去。遇着文姫時，倒反避了，也不與他接譚」。禁則は〈広〉と似た表現をとり、誓約は〈広〉の「愈加持重」を敷衍したもの。3—③：該当する台詞なし。3—①で「梅軒搖頭道，…一定着鬼了」と第三者に言わせている点は〈広〉と同じ。3—⑤の台詞についても同様。またここで、〈広〉は狐を発見した蔣生の台詞「被你坑陷殺我耶」を載せるが、この台詞は〈耳〉には無く、〈型〉（型第38回の略）に「我幾平被你迷殺了」とほぼ同じ台詞が見える。

〈広〉と〈型〉の表現が類似し〈耳〉にない例はこれにとどまらず，3—④の狐に布袋を渡す場面、3—⑥の狐と蔣生が別れる場面、4—②の蔣生が娘を担いで運び出し治療する場面などもそうである。設定でも、1—⑤で〈広〉は蔣生が娘を想う詩一首を吟じ、その晩に娘が訪れるが、〈型〉も蔣生が呉歌児を唱っているその時に娘が現れる。〈耳〉には該当する場面設定がない。このように見てくると、型第38回は『広艶異編』系統に属するテキストであり、二刻巻29と系統を異にすることが分かる。

そもそも三刻で削除された回末の批評文とは次のようなものであった。

雨侯[60]曰，此事殊不經。然而『鴻書』嘗載之。意六合中何事不有乎。然狐能自悔而贖過，猶是獸中之有人心者。

この物語が『鴻書』に収録される事を明記している。評者陸雲龍が『鴻書』を見ていたのなら、編者陸人龍もそれを見ていたことは間違いないだろう。『鴻書』巻91は末尾に『広艶異編』と出所を明記している[61]。だが先述のように『鴻書』は『広艶異編』を節略しており、型第38回は『鴻書』で節略された箇所をも含むので、『鴻書』にもとづくものではない。やはり『広艶異編』を直接素材とした可能性が高い。とすれば二刻巻29と型第38回は同話と考える必要はなく、再収云々は問題とならないだろう[62]（前図参照）。

だが両者が全く関係なしに存在したのかとなると、議論の余地は残る。例えば1—④で「四目交盼，覺都有情」とあるのは，〈広〉で「其女不知人私視」とあるのとは異なり、寧ろ二刻巻29のプロットに近く、1—⑤で〈二〉は「那小姐…有時也眼瞟着蔣生，四目相視」と、似た表現をとっている。これなどは白話化による偶然の一致とも考えられようが、他にも1—⑤〔延滞1〕で蔣生が柳長茂に媒人を頼むと、柳が「你爹要靠你，決不肯放你入贅。他要靠他，如何肯遠嫁」と結婚の無理なことを言うが、このプロットも〈広・耳〉には見えず、〈二〉に「他是个仕宦人家，我是个商賈，又是外鄉，…料不是我想得着的」と、門戸の相違や他郷人であることから諦めるのと類似している。

このように両者には類似した描写があるが、狐妖に対する態度を見ると、型第38回は二刻巻29をさらに押し進めたところがある。入話から正話へ移る時に次のように述べている。

物久爲酉，卽能作怪。無論有情無情。或有遇之而死，或有遇之而生，或有垂死悟而得生，其事不一。也都可做个客座新譚，動世人三省。

狐妖譚に一定の型（パターン）があることの認識は二刻巻29と共通するが、それは情の有る無しに関わらず、ある者は狐妖に遭遇して死に、ある者は生き、またある者は死に瀕して悟り命拾いをすると、狐妖の情の有無は物語の構成とは関係がないとする態度は、二刻巻29の議論を徹底させたものと言える。つまり、もはや狐妖との遭遇に何の因果律も考えられていないのである。

だが、これは『情史』の「狐雖異類，可以情感」と、狐妖に情を見出す批評と全く対照的な議論である。正反対であるゆえに、二刻巻29との関係ではなく、寧ろ『情史』との関係を考えるべきかも知れない。三者の関係を整理するのは、資料不足のため容易ではないが、相互関係の可能性は留保しておかざるをえないだろう。

狐妖についての意識には相違する面もある。型第38回には二刻巻29にはなく、物語の性格を大きく変えるプロットがある。それは2—①で狐が女性に化ける場面を置いたことである。この場面は『太平広記』巻454「劉天鼎」の「必戴髑髏拜北斗。髑髏不墜，則化爲人矣」を踏まえている[63]。これにより狐は狐妖性を増す。本来の狐妖の姿を取り戻した狐は、もはや隠れる必要はなく、「這妖是大別山中紫霞洞裡一箇老狸。…內中有通天狐，能識天文・地理，其餘狐狸，年久俱能變化」と正体を事前に明らかにされる。これも『太平広記』巻477「説狐」の「千歳卽與天通，爲天狐」を踏まえている。これは二刻巻29ではわずかに狐の台詞として「我在此山脩道，將有千年」と語られるに過ぎず、狐妖性が

極めて希薄であることと対照的である。この場面は『情史』批評文の「狐實陰見」から着想を得た可能性もあるが、狐妖に対する醒めた態度は、入話で六種の妖怪を列挙しており、狐妖もその妖怪の一つでしかないととらえられていることや、また2—④のエピソードで、物音という聴覚による出来事を、「韋梅軒見他被上有許多毛」と視覚による明確な出来事にして、より狐に実体性を持たせていることに表れており、編者の意識を反映している。このように狐妖に対する態度には、二刻巻29と相通ずる面と対照的な面が見られる。

6. 型第38回の性格

ところで型第38回の批評文は、実際は『広艶異編』にもとづいたにも関わらず、何故『鴻書』の名を出したのか。おそらくこの書物に湯賓尹が関係していたからであろう。湯賓尹は有力な政治家であるとともに、明末出版界の大立者であった[63]。『鴻書』は封面に「湯宣城先生鑒定」と銘打ち、序文の撰者にはその湯賓尹をはじめ、焦竑、李維楨、顧起元といった人物が名を連ねている。『鴻書』はそのため通俗類書とは見なされず、知識人の読むべき参考書のように受け取られたのではないか。陸雲龍はその評価を利用したのであろう。

これは、『型世言』という題名と共に、その性格とも関わってくると思われる。「世に範を垂れる書物」という題名はそのまま編者の編纂方針として、物語の潤色にも浸透している。特に登場人物の形象は特徴的である。例えば1—⑤〔延滞2〕で「只是文姬，雖是客店人家，却甚端重。蔣日休嘗是借些事兒，要鑽進去。他是不解一般，每見蔣日休辭色有些近狎，便走了開去」と、宿屋の娘でありながら、蔣日休が事寄せて近づこうとすると無視して避ける賢明で貞淑な女性に描いている。この描写は〈広・耳〉にはなく、二刻巻29では逆に、絹織物の販売に来る蔣生を、「那小姐雖不十分出頭露面，也在人叢之中，遮遮掩掩的看物事。有時也眼瞟着蔣生，四目相視」と、羞恥心を持ちながらも人陰から窺わずにいられない人物に描く。また4—②の団円で〈耳・二〉はすんなりと二人が結ばれるのに対して、〈広〉は「父母合家驚悔，乃欲設宴延生結納，生亦欲償聘禮。女拒之，以父母情薄，不捨財捄己」と、両親と蔣生が婚礼に従おうとするのを拒み、両親が全財産を擲ってでも治療しようとしなかったことを責める。それによって蔣生は狐の予言通り娘を無償で手に入れる。この女性の怒りは自身の生命の軽さに対する怒りではなく、構成上の要請であった。これを〈型〉は次のように改める。

父母…要接女子回去。女子說道，這打發我出來，爹娘也無惡念。只怎生病

時在他家，一好回去。既已許爲夫婦，我當在此，以報他恩。

まず両親が自分を外に出したのは悪意ではないと両親を弁護する。だが病気の時に蔣日休の世話になり、治れば帰るという忘恩はできない、ましてや已に夫婦の約束をしているのならなおさらだと、家へ帰るのを断る。つまり文姫は親へは子としての忠孝を以て許し、蔣日休へは妻としての貞節を以て誓ったのである。女性の完全なる模範の形象と言ってよい。これに対し蔣日休は、「倒是蔣日休道，既是姐姐不背前言，不妨暫回。待我回家與父親說知，行聘，然後與姐姐畢姻」と、礼にかなった婚姻を主張する。編者にとって主人公はあくまで完全なる模範でなければならなかった。それが他の部分の行動と矛盾してでもである。文姫はこうして家へ帰り、全てが申し分のない状態で物語は閉じるのである(34)。ここでは狐妖譚はこの模範を盛る器でしかなく、狐妖は六朝以来の害獣に押し戻され、それと表裏して訓戒の対象となっている(35)。

7. おわりに

明末に盛行した狐妖譚「大別狐妖」には二つのテキストの系統が存在し、二刻巻29と型第38回は別の系統に属すること、従って両者を一話として扱うことはできないことが明らかになったと思う。

「大別山狐」は狐媒という、明以前には見られない、その意味で時代性のある類型を持っている。この類型自体が狐妖性よりも「撮（聯）合」という構成そのものを眼目にしている。二刻巻29はこの構成を最大限に意識した結果、狐妖からマイナスイメージが消え、狐は舞台回しとして物語中に存在し、その役割を終えると物語から去ってゆく存在となった。だが一方で，この類型は狐妖以外の主題を持つようになる。『輪廻醒世』や型第38回はこちらの方向へ向かった。そこでは宿縁や訓戒がその主題となる。それと表裏を成して狐妖性が復活した。

型第38回が二刻巻29の（或いはその逆の）パロディであるかどうかは今のところ不明という他はないが、ほぼ同時に、一つの類型をもとに二本の白話小説が生み出されたことは、或る意味ではその類型の文学的生命力が極盛を迎えたことを示している。これらの白話小説は明末という時代に生まれるべくして生まれた、狐妖譚の流れの中のピークの一つであると思われる。

注

(1) 主な研究論文には、内田道夫「狐妖」集刊東洋学第6号(1961、9)、西岡晴彦「狐妖考—唐代小説における狐」東京支那学報第14号（1968)、同「〈任氏伝〉遡源考—狐妖

婚姻譚の系譜」熊本大学法文論争第35号（1975）、同「任氏と嬰寧の間―狐妖イメージの変容」東京大学東洋文化研究所東洋文化58（1978、3）、戸倉英美「変身譚の変容―六朝志怪から『聊斎志異』まで」同東洋文化71（1990、12）などがあり、また前野直彬「宋人伝奇について」集刊東洋学第11号（1964、5）は「任氏伝」と宋代狐妖譚とを比較している。

(2) 凌濛初の小引及び酔郷居士の序。

(3) テキストは上海古籍出版社1985年日本内閣文庫蔵本影印本を使用。

(4) 下線①③④はそれぞれ巻447の「孫巖」「狐神」「陳羨」、⑥は巻452「任氏」、⑦は巻447「陳斐」巻449「鄭宏之」巻453「李自良」など、⑧は巻453「李令緒」巻454「姚坤」などを踏まえている。但し③の原文は「唐初已来」。また②は『本草綱目』巻52「狐」の集解に李時珍のコメントとして同じ語句が見える。⑤は駱賓王の「代李敬業討武氏檄」の一句。

(5) 前野直彬『風月無尽―中国の古典と自然』（東京大学出版会1972年）「狐」で狐を分類し、害獣の項を立てている。だがこれは狐妖譚の類型として述べられているのではない。また吉野裕子『狐』（法政大学出版局1980年）も中国の狐を、妖術・徳性・吉凶・学徳・土徳に分類しているが、ここで述べる狐妖譚は妖術の中に含められている。

(6) 十八巻。蓬左文庫蔵本参照。この書物は全て話の結末を宿縁に帰しているところに特徴がある。封面に「今生受，今生造，二語可括輪廻，夫旨習矣。不察遂世多夢夢、欲使醒須仗輪廻，故爲是刻」という宣伝文がある。劉輝、薛亮「明清稀見小説経眼録」文学遺産1993年第１期参照。

(7) 五巻説狐一巻、墨床子撰。万暦間の出版とされる。内閣文庫に草玄居刊本とその林羅山による手校本がある。また筑波大学にはこの両本と版式の異なる写本がある。中村幸彦「林羅山の翻訳文学―『化女集』『狐媚鈔』を主として―」『中村幸彦著述集』第六巻（中央公論社1982年）所収参照。『狐媚叢談』は全部で133条の狐の故事を集めてあり、このような書物の出版自体が、当時における狐妖譚への関心の高さを物語っている。その説狐には二刻巻29のナレーションと共通する語句が見られる。下線④については「説者以爲古先淫婦所化，其名曰紫，其怪多自稱阿紫，善爲媚惑人，故稱狐媚」と、むしろ「陳羨」より近い表現である。また、⑤についても「駱賓王檄，蛾眉不肯讓人，狐媚偏能惑主」とある。或いは凌濛初がこの書物を参照した可能性もあろう。

(8) 『聊斎志異』巻３「毛狐」、巻７「阿繡」「小翠」など。なお澤田瑞穂『中国の昔話』（三弥井書店1975年）p.240に紹介されている「花嫁狐」は轎のモチーフが等しく、類話であるが、狐が自らも報恩のため人間の男性と団円している。異類と人間の団円は前掲戸倉氏論文のいうように『聊斎志異』に特徴的である。その際狐が狐妖性を失うことを戸倉氏は伝統的な物語のスタイルの負の遺産というが、光緒十四年刊酔月山人撰『狐狸縁全伝』も異類通婚型から狐妖が転生して団円しており、類型の継承性生産性の面から評価されるべきであろう。『狐狸縁全伝』については、澤田瑞穂「石派書『青石山狐仙伝』について」『中国の庶民文芸』（東方書店1986年）所収参照。

(9) プロットの設定については異類通婚型を基準とした。前掲西岡氏論文参照。

(10) 前掲西岡氏論文参照。

(11) 『南音三籟』附刻「譚曲雑箚」(上海古籍出版社1963年明刊本影印)。

(12) 前掲戸倉氏論文の注(24)で、二刻巻29を評して「狐の登場する話は、白話小説の中でもあくどさを増す傾向があるのではないかと思われる。」という。確かに趣向の悪趣味化は否めないが、それでは何故、どのようにしてこの物語が生まれたかの説明にはなるまい。

(13) この問題はついては拙稿「『耳談』と『拍案驚奇』—「二拍」の来源問題について—」筑波中国文化論叢12、1992年で触れたことがあるが、改めて論じ訂正を加えたい。

(14) テキストは、『耳談』は中州古籍出版社1990年排印本を、『情史』は岳麓書社1984年排印本、春風文芸出版社1986年排印本、『馮夢龍全集』上海古籍出版社1993年所収明刊本影印本を適宜使用。

(15) 全集所収本はここを「揭門」とするが意味が通らず、「謁門」の誤りであろう。

(16) 全集所収本。排印本には見えない。

(17) 『今古奇観』序(上海亜東図書館民国22年)参照。また趙景深「《二刻拍案驚奇》的来源和影響」(『中国小説叢考』斉魯書社1980年収)も『情史』とともに挙げる。但し紹介されている概要は『情史』のもの。

(18) テキストは上海古籍出版社古本小説集成所収本を使用。

(19) 岳麓本は「若夜」を「毎夜」とする。

(20) 筑波大本には書写の誤りが散見されるが、同じ系統のテキストであることに変わりはない。

(21) この二つの系統は、幽婚譚をモチーフにした二刻巻30「瘞遺骸王玉英配夫，賞聘金韓秀才贖子」の来源の分布についても同様であり、二刻巻30はやはり『耳談』系統に含まれる。

(22) 『拍案驚奇』巻18「丹客半黍九還，富翁千金一笑」、二刻巻8「沈將仕三千買笑錢，王朝議一夜迷魂陣」、二刻巻14「趙縣君喬送黄柑，吳宣教乾價白鏹」など。

(23) 拙稿「『拍案驚奇』の戯曲化—『蘇門嘯』より見た『拍案驚奇』の読まれ方—」中国文化1993参照。

(24) 孫楷第『中国通俗小説書目』(人民文学出版社1982年)p. 102霊狐三束草、胡士瑩『話本小説概論』(中華書局1980年)p. 591、前掲趙景深論文参照。また大塚秀高「二刻から三刻へ—幻影をめぐって」漢学研究第6巻第1期民国77年6月は「別の可能性」を留保して、孫・胡両氏の説を踏まえている。

(25) 前掲大塚論文は崇禎四年、鄭振鐸「明清二代的平話集」(『西諦書話』三聯書店1983年p. 194)、孫楷第『戯曲小説書録解題』(人民文学出版社1990年)p. 129、胡士瑩前掲書p. 506などは崇禎十六年と推定している。

(26) 陳慶浩『型世言』(中央研究院中国文哲研究所民国81年影印)「導言」参照。但しこの文章は前掲大塚論文の主旨を誤認している。以下『型世言』からの引用はこのテキストによる。なお『型世言』を論ずるとき『(別本)二刻拍案驚奇』を無視することはできないが、これには二刻巻29に相当する話が収められていないため、ここでは触

れないこととする。

(27) テキストは古本小説集成所収本を使用。両種の排印本（北京大学出版社1987年・北京燕山出版社1987年）はそれぞれこれと別のテキストにもとづき、文字に異同がある。活字の問題なのかどうかは不明。

(28) 前掲大塚論文参照。

(29) 雨侯は『型世言』の編者陸人龍の兄陸雲龍のこと。又、各巻の前に陸雲龍の序文が付せられている。詳細は前掲大塚論文、陳慶浩「導言」など参照。

(30) 東京大学東洋文化研究所蔵本参照。

(31) 型第38回は冒頭で狐妖を劉晨と阮肇の説話と結びつけて論じている。これは引き続いて引用している程篁墩（名は敏政、型は墩篁に誤る、成化二年の進士、礼部右侍郎）の詩「劉阮遇仙図為提督河道楊克敏通政賦」（『篁墩文集』巻73、『四庫全書』収）にもとづく。ただし引用句は原詩を誤って引いている。ところでこの発想は、『狐媚叢談』巻5「驪山狐」にも見える。表現も〈型〉:「劉晨・阮肇天台得遇仙女，向來傳做美譚」、「驪山狐」:「劉晨・阮肇天台遇仙女，心竊疑矣」と末一句を除いてほぼ等しい。「驪山狐」は続いて疑う理由を述べて「或者山精狐魅幻化迷之耳」という。一方〈型〉は程篁墩の詩を引いた後、「或者妖物幻化有之」という。「大別山狐」は「驪山狐」に隣接しており、編者が『狐媚叢談』を参照した可能性も有ろう。今はどちらとも言えぬが、どちらにしろ同じ系統のテキストである。

(32) 『酉陽雑俎』巻15諾皐記下より出る。髑髏のモチーフを持つ狐妖譚には『太平広記』巻451「僧晏通」、これと同系統の『宋高僧伝』巻第24「唐沙門志玄」、七巻本『搜神記』巻之七、『狐媚叢談』巻3「狐戴髑髏変為婦人」、また「胡媚娘伝」などが挙げられる。

(33) 金文京「湯賓尹と明末の商業出版」（荒井健編『中華文人の生活』平凡社1994年収）参照。

(34) 『型世言』10巻40回はほぼ2回ごとに主題がまとまっている。孝義・忠節・訓戒・貞烈・友愛・清廉能吏・因果応報といった徳目であり、多かれ少なかれこの傾向がある。巻之十の4回だけは傾向が変わっており、変妖の話が集められている。

(35) 陸雲龍の題詞に「世有男狐，又有女狐，有眞狐亦有僞狐。總之，一有狐氣，便能以媚爲魅。昂昂六尺軀，有半死狐穴中。蔣郎其最幸者矣。然識者終曰，倖不可邀」とある。また本文末に編者の言葉として「人都稱他奇遇，虧大別狐之聯合。我又道，若非早覺，未免不死狐手。猶是好色之戒」とあり、狐媒型を意識しつつも、これを害獣として扱っている。

（筑波大学大学院）